

小学校音楽科教育における音楽づくりの授業研究

ー 学びのユニバーサルデザインの考え方に基づいて ー

井口 直
教育方法開発コース

1 テーマ設定の理由

2020 年の新型コロナウイルス感染症は、学校教育にも多くの課題をもたらした。音楽科教育では、歌ったり演奏したりすることが難しくなり、現在もなお合奏や合唱といったアンサンブルの機会が大幅に減少している。日本音楽教育学会のアンケートでは、これまでの音楽の授業が歌唱や器楽に偏りがちであったことを再考するべきとの意見が出された¹⁾。そこで筆者は、音楽づくり・鑑賞の学習活動の充実が求められていると捉えた。特に音楽づくりは、子供の豊かな発想を生かし、友達と協働する喜びを味わうことができる一方で、指導法や教材のイメージが難しいこと、「活動あって学びなし」の状況になりかねない等、教師も子供も難しさのある学習内容であると考ええる。

また、特別な支援を要する子供の増加、生徒指導対応の複雑化、家庭の社会経済的背景による子供の貧困等、子供の多様化が進んでいる。つまり、子供の経験や能力・学習意欲も多様化していると考ええる。中教審は、「多様な子供たちを誰一人取り残すことのない個別最適な学びの実現」を提言し、義務教育において誰一人取り残さないことを徹底する必要性を述べている²⁾。しかし、限られた授業時間・教員不足の現状では、全ての子供へ個別に学習支援をすることは難しいと考える。そこで、全ての子供を対象に学習へのアクセスを可能にする学びのユニバーサルデザインに着目した。

昨年度は、小学校第5学年「打楽器を用いたリズムアンサンブルづくり」の授業を行った。手立てに「常時活動・学習内容のキーワード化・全体構想図と図形楽譜を用いたワークシート」を用いたが、ワークシートの複雑さ等の課題も多くあり、今年度も同題材にて授業研究を行うことにした。

2 基本的な考え方

(1) 学びのユニバーサルデザインについて

学びのユニバーサルデザイン (UDL) は、アメリカの CAST (The Center for Applied Special Technology) が開発した教育理論である。CAST は、21 世紀の教育の目標は単に知識を習得することではなく「学びのプロセス」を習得することとし、学びのエキスパートの育成を目指している。学びのエキスパートとは、学びたいという気持ちを持ち、方略的に学ぶ方法が分かり、自分に合った柔軟なやり方で生涯にわたる学習に充分備えられている者である。そこで CAST は、あらゆる子供のニーズに対応できるよう「オプション(代替案)」の提供を重要視している。CAST の研究は脳科学に基づいており、3つのネットワーク(認知「何を学ぶのか」・方略「どのように学ぶのか」・感情「なぜ学ぶのか」)を UDL 3 原則とし、授業実践に生かすことを目的にしたガイドラインを公表している。

(2) 小学校音楽科教育「音楽づくり」について

『小学校学習指導要領(平成 29 年告示)解説 音楽編』によると、音楽科教育は A 表現(歌唱・器楽・音楽づくり)、B 鑑賞、[共通事項]で内容構成され、音楽づくりは「即興的に表現する活動」と「音を音楽へと構成する活動」となっている³⁾。特に高学年では、即興的に表現する活動や音を

音楽へと構成していく活動を通して子供が試行錯誤し、音楽をつくる喜びを味わうことができるように指導することが求められている。

(3) 音楽科教育とUDLの関連性

先行研究として関の実践研究を用いた⁴⁾。関は、器楽(鍵盤ハーモニカ)の授業実践を通して、学習環境やカリキュラムに柔軟性をもたせることで、より多様な子供たちを想定した授業となることを提示し、UDLガイドライン器楽版を作成している。そこで筆者は、2年間の同題材における実践授業の分析・考察を通して、UDLガイドライン音楽づくり版を作成することとした。

3 実践の概要

本実践は、第5学年「打楽器でリズムアンサンブル」を4時間計画で行った。第1時は各打楽器の響きの特徴に気付く、第2時は打楽器の組み合わせを決める、第3・4時は創作という構成である。事前調査を経て、子供たちの音楽づくりの悩みは「構想面・表出面・演奏面」にあると分析し、筆者はUDLガイドラインにおける3原則と関連性があると考えた。例えば、原則Ⅰ「提示(理解)」・原則Ⅱ「行動と表現」のための多様な方法を提供することで、子供が作りたい音楽を書き表す手立てとなる。原則Ⅲ「取り組み」のための多様な方法を提供することで、この方法なら自分にもできるかもしれないと活動に向かうエネルギーになると考えた。以下3つの手立てである。

表1 常時活動の内容

① 常時活動「4文字リズム打ち」

常時活動とは、授業の主たる内容とは別に、毎時間の継続的な積み重ねによる教育効果をねらった活動である⁵⁾。筆者は学部生での教育実習で常時活動の良さを実感した経験があり、昨年度も導入

1	・ 輪になり、拍に合わせて友達同士で肩たたきをする。 ・ 拍に合わせて足踏みし、教師のリズム打ちを真似る。
2	・ 3つのリズムを用いて、教師のリズム打ちを真似る。
3	・ 教師がランダムに提示するリズムを真似る。 ・ リズムごとに輪になり、教師の合図で順番につなぐ。
4	・ 教師がランダムに提示するリズムを真似る。 ・ リズムごとに輪になり、教師の合図で順番につなぐ。 ・ 教師の合図で楽器をふやし(へらし)て重ねる。

した手立てである。活動目的は、「リズムアンサンブルの楽しさや難しさを味わう・音楽の仕組みを試しに試してみる」である。授業冒頭で行った活動内容は表1の通りである。

② テーマを設定し、作りたい音楽のイメージをもつ

4文字の言葉からイメージを膨らませ、ストーリー性のある音楽づくりを提案した。3つのリズム(図1)と4文字の言葉を関連付けることで、子供も視覚と聴覚を働かせながら自然とリズムに親しむことができると考えた。4文字の言葉は、子供たちから募集し教師が複数に精選してグループ毎に選択するよう促すと、「アジサイ・やきにく・ドナルド・あまおう」となった。教師は「ひまわり」をテーマにした作品を見本として提示した。

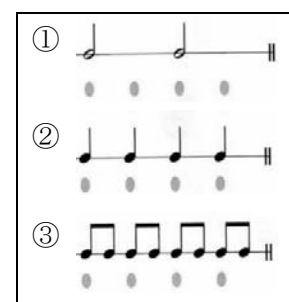


図1 3つのリズム

③ 図形楽譜を導入したワークシート

図形楽譜とは、音を視覚的に表現するツールとして、五線譜ではなく図形で表したものである⁶⁾。UDLガイドラインでも、代替手段を用いて馴染みのない構文(楽譜)や、構造を分かりやすく示すことの必要性を述べている。つまり、楽譜の代替手段として、学習者が学んだり分かったりしたことを表現しやすくなる効果があるのではないかと考えた。ワークシートは、「テーマ、選んだ楽器・音楽の仕組み・リズム、こだわりポイント」を記述できるよう構成し、グループに1部配付した。

4 実践の考察

① 常時活動「4文字リズム打ち」

第1時では、「アンサンブルは2人以上で歌ったり楽器を演奏したりすること」と言葉の意味を確かめたことで、学級全体で活動に取り組む意欲を引き出すことができた。また、空間の広さを活用して輪の隊形で活動したことで、わくわく感や視線を合わせやすい安心感を生み出すことができた。第2時では、「ひまわり」を当てはめた3つのリズムを教師に続いて真似るように促した。

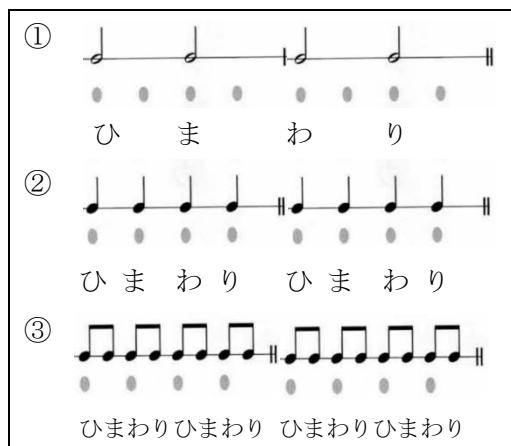


図2 第2時の板書

「①のリズムは1回なのに、③のリズムは4回もひまわりが入るね」と子供がつぶやいており、音符の持続する長さの違いに気づいていることも分かった。第3・4時では、個人でリズムを選択するよう促した。③のリズムで拍が大きくずれてしまった時、リズムが細かい時は拍の頭の音を強く打つと良いことを助言すると、子供たちはお互いに拍を体で感じ合ったり、視線を合わせて手拍子を揃えようとしたりする姿も見られた。第3・4時では音楽の仕組みも段階的に導入した。自分のリズムが入るタイミングや重なる順番が分かるように板書でリズムカードを並べて提示した。「最後は全部のリズムが重なっているってことか」という子供のつぶやきからも、視覚・聴覚の両方から情報提供することの必要性を実感した(図3)。課題は、学習内容及び活動の多さである。音楽科では、子供の発達の段階や指導のねらいに応じて〔共通事項〕から適切に選択・関連付けて授業構成することが大切である。本時では、「反復・呼びかけとこたえ・変化」等、複数個選択したため、1つまたは2つに精選すべきであると学んだ。

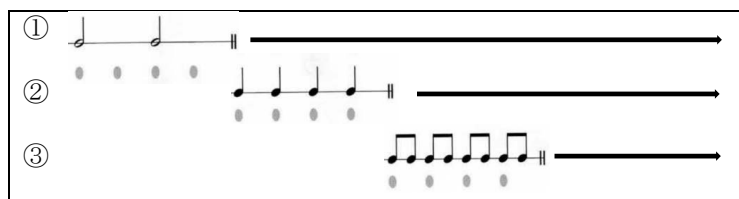


図3 第3・4時板書

② テーマを設定し、つくりたい音楽のイメージをもつ

つくりたい音楽のイメージを広げる手立てとして、楽器ごとに役割分担をし、ストーリー性のあるイメージづくりを提案した。見本で提示した「ひまわり」は、「種を蒔き、水を与えて、時間が経つと花が咲く」という育つ過程のストーリーである。楽器の役割分担は、種を蒔く音を「カスタネット」、水を与える音を「すず」、時間が経つ音を「ウッドブロック」、花が咲く音を「トライアングル」とした。イメージづくりのヒントに、テーマの言葉に関する「様子・まわりにあるもの・気持ち」を提示すると、「アジサイのまわりにはカタツムリがいるね」、「やきにくは、食べている時は幸せな気持ちだけど、網からだんだんお肉が無くなるさみしさもあるね」等、子供の様々な思いや経験を引き出すことができる良さがあつた。課題は、グループで選んだ言葉によってイメージのしやすさに差が生じたことである。改善案としては、学級全体で共通のテーマを設定することである。イメージづくりは学級全体、アンサンブルづくりはグループと活動形態も分けることができる点、よりねらいに焦点化した授業展開になる点がよさである。例えば、実習校の周辺の通学路には美しいあじさいが咲いていた。そこでテーマをアジサイとし、学級全体で「かたつむり」や「雨」、「水たまりを踏む音」等のイメージを広げ、ストーリー性を生み出すことができると考えた。

③ 図形楽譜を導入したワークシート

図形楽譜を用いることで、リズムを記号（●）で置き換えることができ、子供もワークシートに簡単に書き表すことができた。まさに、楽譜の代替として有効であると実感した。また、ワークシートは、拡大印刷したものをラミネート加工したことで、グループみんなでワークシートを囲んで見たり、何度も書き直したりできる良さもあった。図4は「アジサイ」をテーマとしてアンサンブルづ

[illegible]

図4 完成作品(アジサイ班)

くりを行った班のワークシートの記述を筆者が記載したものである。カスタネット・タンバリン・すず・トライアングルの4つの楽器で、カタツムリ・水のつぶ・雨・花を表そうとし、楽器の響く長さの違いを生かした組み合わせにしていることが分かる。リズムのつなげ方や重ね方に着目してみると、水のつぶと雨を重ね方の違いで表現している。雨は降り続ける様子から継続的にリズムを鳴らし、水のつぶは葉や傘などから水たまりに滴る様子を表そうとして間隔をもって鳴らすことを考えたのだろう。このようなアイデアは、子供たちが日頃の通学路等で見たり経験したりしたことが表出しているのではないかと感じた。課題は、子供が演奏する時の楽譜として不足していた点である。3つのリズムはのせておく等、演奏面を配慮した教材づくりは今後の視点としたい。

5 成果と課題

音楽づくりは、歌唱・器楽・鑑賞で学んだことを活用するため、教師と子供の双方にとって難易度の高い学習活動であることを実感した。そこで、テーマを設定しイメージをつくること、ワークシート図形楽譜を用いることで、音楽づくりへの障壁をなくす一助となると分かった。その際、題材に合った〔共通事項〕を精選することの大切さも学んだ。最後に、2年間の研究の成果としてUDLガイドライン音楽づくり版を作成した。今後は、年間を通じてUDLに基づいた音楽の授業実践、小学校6年間のつながりを踏まえ、他の教科にも積極的に取り入れていくことを目指したい。

注

- 1) 菅裕「コロナ感染症対策下での音楽科授業についての調査」日本音楽教育学会『音楽教育実践ジャーナル』vol. 19, 2021, p. 30
- 2) 中央教育審議会『「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと協働的な学びの実現～(答申)』, 2021, p. 1
- 3) 文部科学省『小学校学習指導要領(平成 29 年告示)解説 音楽編』2017, 東洋館出版社, p. 21
- 4) 関真璃亜「小学校音楽科における UDL ガイドラインに基づく器楽授業—鍵盤ハーモニカを中心に—」, 埼玉大学大学院教育学研究科『令和 5 年度課題研究報告書』2023
- 5) 阪井恵・酒井美恵子「小学校音楽科授業における常時活動の実態に関する研究：調査報告とその結果をめぐる考察」, 日本学校音楽教育実践学会『学校音楽教育研究』vol. 19, 2015, pp. 232-233
- 6) 小林田鶴子「音楽教育における音地図の活用とその意義」, 日本音楽教育学会『音楽教育実践ジャーナル』vol. 9, 2011 年 8 月, pp. 48-49